78

安政版『素問』の刊行意図

吉岡　広記
日本鍼灸研究会

【緒言】筆者は，日本鍼灸史学会（第 18～20 回）において，『素問』の内閣文庫所蔵日本安政二年重刊本（300-0141．以下，安政版と略す）と早稲田大学所蔵本（ヤ09_00549．以下，早大本と略す）の校勘を通じて，①早大本が下刷りであること，②最初の下刷りが顧従徳本と同様の白文であったこと，③校正のある段階で文字が改変され附訓されたことなどを明らかにしてきた．以上をふまえ，安政版の刊行意図を考察したい．

【動機】安政版の久志本跋（早大本の森約之識語に多紀元堅の代撰とある）によれば，江戸期『素問』研究の根源的な問題は，「訛舛相い仍なり，殆ど読むべからざるを病む」ところの「坊間俗刻」の存在にあった．これに該当するのは，『経籍訪古志』（以下，『訪古志』と略す）に顧従徳本と「板式亦た同じ，……文字或いは譌有り，蓋し坊間の重雕に係る」と評された明刊無名氏本（以下，無名氏本と略す），もしくは江戸前期以来，『素問』の通行本であった寛文三年刊本（以下，寛文本と略す）のいずれかである．

無名氏本には，真柳誠の「明瞭な誤刻が多く……顧従徳本に基づく海賊版の可能性が高い」という鑑定（「はじめに・概略・凡例・医理之属 書号 05857–05858」，『漢方の臨床』，54 巻 4 号，2007.4，675–680 頁）がある．また，筆者の検討によっても，偏旁の省略や形誤などの見られる，劣悪な版本と判明している．にもかかわらず『訪古志』が「俗刻」と断じなかったのは，顧従徳本と版式を同じくする点を評価したためであろう．

一方，寛文本は，『訪古志』に「蓋し坊間に讎を求め，伎倆，周氏の旧に復せず」とあるのみで，無名氏本には劣るも「俗刻」とはされていない．ただ，寛文本で合刻されている『霊枢』については，『訪古志』に「文字多く譌れり，亦た周氏の旧に非ず」とあり，渋江抽斎（『霊枢講義』）も「本経が経文，多くは張氏『類経』と同じ．則ち疑うらくは此の本，坊間の俗刻にして，周氏が梓する所に非ざるなり」とし，さらに嘉永 5 年に入手した周曰校本との校勘を通じて「俗悪」と評している．

以上のことから，久志本跋に言う「坊間俗刻」とは，寛文本を指すと考えられる．

寛文本と安政版には，底本が異なるという相違点と，附訓という共通点がある．安政版の版下に用いられた渋江抽斎所蔵の顧従徳本は，「医庠本」（恐らく『訪古志』が「最正」とする明代模刻宋本［聿修堂蔵］）と「纖毫無差」であったというから，その当時，用い得る最善の版本を選択したことになり，明代の重刊本による寛文本との差は歴然である．安政版の附訓の理由は，酷評の対象が寛文本であることから，自ずと理解される．考證による文字の校訂と附訓によって，通行本に代わる最善の校訂本を，しかも広範に提供することこそ，安政版の意図するところであった．久志本跋の「宋本の旧を失せざるに庶く，嘉祐の真釐，然り以て観るべし」も，安政版が顧従徳本の忠実な覆刻を目指したものではないことを表明したものと見ることができる．

【結語】安政版の刊行意図は，寛文本に替わる最善のテキストを広く流布させることにあった．用い得る最善の版本を覆刻し，かつ文字を改変し句読訓点を施したのは，ひとえにそのためであろう．